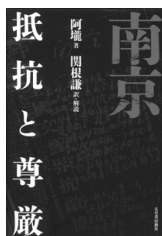


抗日前線司令官が描く南京陥落の実相 ——「胡風派分子」阿壠の傑作、執念の全訳なる

阿壠著／関根謙訳
南京 抵抗と尊厳



四六判 402頁
五月書房新社
[本体 1,900円 + 税]

長堀 祐造

米中対立を奇貨として、習近平訪日が実現の運びとなり、日中関係は「正常な軌道」に立ち戻るらしい。もとより歓迎すべきことではあるが、「不正常」な状態がまたいつ繰り返されるともかぎらない。日中関係には常に危うさがつきまとう（言うまでもなく日韓も同様だが）。戦争の傷痕は、戦後七〇年以上を経た今も癒えたとは言えないからだ。

日中戦争中の最大の事件、トラウマの一つは一九三七年一二月一三日の「南京陥落」に付随する南京大虐殺にほかなるまい。阿壠の小説『南京 抵抗と尊厳』（原題は『南京』）は、同年九月の日本軍による南京爆撃の回想シーンから始まるが、作中の現在は一月から一二月一三日の南京陥落までのこと。迫真の戦闘描写と混乱の南京、そして随所に沓えを見せる作家の文学的素養が一気に読者を作品世界に引き込んで

いく。まずは本書巻末の「完全邦訳版の訳者解説」によって、『南京』の基本的性格を確認しておこう。「」は評者注。

〔『南京』は〕日本侵略軍の残虐さを容赦なく描いていたが、それと同時に、当時の南京防衛軍内部の問題も鋭く抉り出されていた。また、市民の生活や感情、知識人と農民間の矛盾とその克服の過程、中国人の覚醒の実態なども描きこまれていて、南京陥落の真の意味を問う作品であった。作者阿壠は……戦闘者・軍人として、戦闘の勝利への確信に燃えながら、直面した〔南京陥落という〕敗北の意義を闡明しようとしている。

本作は日中両軍による南京戦の戦闘状況を、南京防衛に当

たる中国軍將兵の目を通してリアルに描写すると同時に、部隊内部の人間関係、具体的に言えばその背景にある出身階級や学歴や軍歴にまで踏み込んで人物像を描くとともに、戦略・戦術、軍紀に関わる部分にまで到る。さらには、一般市民、農民らの群像がその生活とともに描かれる。とりわけ戦闘シーンは戦闘体験者でなければ描けない迫力とリアリティがあり、文字表現でなく映像であったなら目を覆いたくなるシーンも多い。全編を通して、高射砲などの砲声が擬音を多用して表現されている点も効果的、印象的である。

作者阿端自身は本作の「後記」で「本書がルポルタージュ〔報告文学〕なのか、それとも小説なのかという問題」は、「私には答えられない」という趣旨のことを語っているが、二つのジャンルの優劣を無条件に決することは不可能なものの、本作は明らかにすぐれた小説となっている。それは明確な「文学意識」とも言うべきものが、『南京』の底流に一貫しているからだ。ルポルタージュであれば、意識的に排されるであろう表現が、この作品世界では息づいている。生きているのだ。小説は、主人公の一人、通信小隊長・嚴龍中尉の朝の歯磨きの場面から始まるのだが、当番兵がこの小隊長の部屋の窓を開けたとたん、読者はたちまち、裕福なインテリ将校（としか思われない）、嚴龍の内面に立ち入ることになる。

……光を浴びて、テーブルの三つの林檎がやややかな紅の光沢をたたえてほほえみ、淡い影を作った。少し向こうには煙草の白金龍が二缶と読みさしの『蕩婦の自伝』（デフォーの小説『モル・フランタース』の中国語版。梁遇春訳、葉公超序。一九三一年、上海北新書局刊）、それにオレンジ色の古い芝居のチケットとその上に置かれた細首の（パリの香水の入った）小瓶が見える。……テーブルの隅には薄緑色の万年筆が無造作に転がっている。（二五頁）

こうして書き出しから、思わず作品世界に引き込まれて行くのは、それがたとえ戦争小説であれ、読書の快感である。この作品に登場するのはインテリ将校だけではない。農民出身の將兵、中国軍上層部、さらに一般市民、農民像が全九章からなる作品全体の構成を見据えた上で、うまく配置されており、上述の嚴龍の描写のようにそれぞれの属性に対応して周到に描き分けられている。

この作品は一九三九年秋に執筆されており、抗日戦を勝利に導くということが大きな動機になっているのは疑いないが、日本軍非難のプロパガンダ小説に留まるものではなく、「文学的価値」を十分に有する作品になっていることは、内容、文体からも見て取れる。第一章の日本の爆撃で逃げ惑う

南京の民衆の姿は悲惨の一語に尽きるし、第四章以降に描かれる同年一二月四日から一三日までの熾烈を極めた南京攻戦は、第八章に至り、陥落寸前の南京挾江門での南京市民、中国軍同士の逃亡をめぐる文字通り必死の争いが描かれるが、これはこうした状況をもたらした日本軍の悪行を際立たせると言うよりも、いつでもどこでも戦争という状況そのものが引き起こす人間の所業をさらけ出しているかのようである。そして、第九章ではついに日本軍が南京に入城、今に伝わる悪行の数々が記されるが、語られる言葉は文学の言葉である。

日本の軍閥はかくも残酷に、直接間接に、中国人を屠殺している。中国人に平和な暮らしを送れなくさせ、悠久の歴史と明媚な風光を持つ都市を壊滅させ、活気に満ちて広々とした大通りを死の道に変えてしまった。こんなに美しい白雲を忘れさせ、あの降り注ぐ陽光に死の混沌と蹂躪とを照らし出させ、あの微風に無残な生臭さを滲みつかせてしまった。(二六八頁)

そして、尾声——エピソードでは南京、蕪湖を失った中国軍が、ほどなく蕪湖を奪還したことを伝え、抗日戦勝利の展

望と確信とを示して小説は終わる。

『南京』では、軍人作家阿瓏はもちろん、日本軍の残酷な悪行を描き、抗戦の大義を示しているのだが、訳者も指摘するように、個々の日本兵を画一的に描くことはしない。民家に入り込んで許しを請う日本兵や、南京占領後に自殺した日本兵を描くことを忘れていないのである。自責の念にさいなまれる日本兵がいたことは、日本内部に「重大な矛盾」(階級矛盾と言ひ換えてもいい)があつたことを意味すると作者は看破している。

尾声——エピソードの後に、ルポルタージュへの未練を断ちかねるかのように置かれた「後記」で、作家は自作『南京』を語る。前年一九三八年に発表された毛沢東の持久戦論の正当性を述べ、南京防衛戦の戦略的誤りを指摘するとともに、『南京』執筆の動機を、当時、中国で反戦運動に従事していた尊敬する鹿地亘・池田幸子夫妻から石川達三のルポルタージュ『生きている兵隊』のほか、火野葦平の『麦と兵隊』三部作が日本で出ていることを聞き及び、これに対抗するルポルタージュが中国で書かれないのは恥辱だと感じたからだと述べる。さらに最後で、執筆に当たっては「胡風先生の『リアリズムの精神をしっかりと把握し、主観の激動に駆られて空虚にならないように』という言葉をかみしめていた」と締め

括っているが、その企図は実現されたと言つてよいだろう。

さて、この作家、この作品の教奇な運命についても一言紹介しておくかねばならない。阿壠（一九〇七―一九六七）は、杭州の比較的豊かな家庭に生まれるが、生家の没落によって、高級小学校のみで学歴を中断、商店の見習いとなる。二〇歳で国民党に入党し、地元の新聞に詩や散文を発表し始め、詩人、作家としての活動を開始した。二四歳のとき、上海に出て中国公学大学部に入るまで、この間はすべて独学で、特に詩作に親しんだ。大学入学後は経済系に籍を置きながら、中国の新文学、ソ連を中心とする外国文学翻訳を幅広く受容し、文学的素養を磨き、二六歳で黄埔軍官学校に入つて、軍人への道を歩み始めるが、中共地下黨員らとの交流を持ち、ゴリーキーが企画中の『世界の日』を真似て、一九三六年

五月二一日の中国を、全国各地の多くの人々の寄稿で綴る茅盾主編の『中国の日』にはS. M. の筆名で、南京の獄中にいた陳独秀と並んで寄稿している。翌年、第二次上海事変では国民党軍の小隊長として上海防衛に当たり、負傷して治療に専念、一九三八年には武漢で胡風らと知り合い、中共の延安抗日軍政大学で学び、胡風主編の『七月』誌にも詩を寄稿した。一九四〇年、文協（中華全国文芸界抗敵協会）の公募に応えて投稿したのが小説『南京』であった。最高の評価を得ながら、受賞には到らず、出版も実現しなかった。以後、抗日戦終結から国共内戦期には国民党軍人として地位を保ちつつ、中共への情報提供を継続したという。その結果、新中国建国前夜の中国文芸工作者会議にも招聘され、中共政権下で文学者としての道を歩み始めるのだが、一九五五年の毛沢

岩田憲幸 編著

『三字唐話』の研究 基礎資料篇

山内智恵美 著

現代中国服飾とイデオロギー

翻弄された120年

九州大学図書館石崎文庫および国文学研究資料館に蔵される二本間の異同を「校勘おぼえがき」として示し、掲出語句・字音を「語句一覧表」「字音表」Ⅰ、Ⅱに整理した唐話研究のための基礎資料。影印附。カラー口絵8頁。 ■8000円

戊戌維新からのおよそ百二十一年間に、中国の服飾に起こった世界でも非常に稀有な現象を「新唐服ブーム」「漢服運動」など、七つの視点から分析を加え、近現代における服飾が如何にイデオロギーに翻弄されたものであるかを究明する。 ■6909円

白帝社

※価格は税別

〒171-0014 東京都豊島区池袋 2-65-1
TEL 03-3986-3271 FAX 03-3986-3272
http://www.hakuteisha.co.jp

東直々の胡風批判、「胡風反革命集団」事件に連座、主要メンバーとして長期刑を宣告され下獄、文革開始で繰り上げ釈放も実現しないまま、一九六七年に獄死した。胡風事件が冤罪と認定され、名誉回復されたのにもない、阿壠も今では名誉を回復している。

『南京』が世に出るのは長い時間を要した。前述の文協主催の公募審査過程では、おそらく、『南京』「後記」冒頭、阿壠が「本書は敗北主義者の書いたものではない」と筆を起すことから見るに、『南京』に対する「敗北主義」批判があったのではないかと推測される。抗戦の勇ましい言葉とシーンだけが望まれた文協授賞作品に、文学的、思索的要素を多分に含む『南京』は好ましくなかったであろう。日本兵の懺悔も、中国軍の戦略の失敗も書いてはならなかったのだ。こうして抗日戦中、日の目を見なかった『南京』は、新中国でも胡風事件などで、出版はままならなかった。一九八七年、ようやくして阿壠の原稿ノートを遺族・友人らが清書したテキストをもとに『南京血祭』が人民文学出版社から刊行される運びとなり、訳者も一九九四年に旧版の邦訳『南京慟哭』（五月書房）を出している。今回の新版邦訳では、『南京慟哭』で割愛した部分を補充して全訳したのみならず、阿壠の自筆ノート原稿も参照しつつ翻訳されていることは旧版から進ん

だ点と評価できよう。訳文もこなれていて、読みやすい。惜しむらくは、本書のなかなかいいところで、わずかながら誤植があること。

一八頁 六行目 完全 ↓ 完全
六六頁 一三行目 狂犬 ↓ 狂犬
一三四頁一行目 ぁ頭を↓頭を など。

本書に併せて収録された「旧版訳者解説」と「完全邦訳版の訳者解説」はともに、本作品を読み解く上で参考となるものであり、また著者阿壠についての詳細かつ周到な紹介となっている。原民喜や石川達三作品との比較など、評者の言及でしななかった多くのことがらについては、是非この二種の「解説」を参照頂きたい。

最後に、本書を堪能した読者に、訳者による阿壠研究の集大成『抵抗の文学 国民革命軍将校阿壠の文学と生涯』（慶應義塾大学出版会、二〇一六年）の併読をお勧めする次第だ。

（ながほり・ゆうぞう 慶應義塾大学）